

# フローベール『ボヴァリー夫人』における報われない美徳<sup>1</sup>

松 澤 和 宏

## 1. フローベールの災禍論

フローベールは、書簡のなかで地震をはじめとする自然の災禍について幾度か触れています。1846年のルイズ・コレ宛ての書簡の中では、イタリアのリヴォルノで起きた地震に触れながら、こうした出来事には、われわれには理解できない隠された意味があるとして、以下のように述べています。

Tu me parles d'un tremblement de terre à Livourne. (...) Il y a, dans tout cela, un sens caché que nous ne comprenons pas, et d'une utilité supérieure sans doute, comme la pluie et le vent; (...) Qui sait si le coup de vent qui abat un toit ne dilate pas toute une forêt? (...) Voilà encore de notre orgueil. Nous nous faisons le centre de la nature, le but de la création et sa raison suprême. Tout ce que nous voyons [ne] pas s'y conformer nous étonne, tout ce qui nous est opposé nous exaspère<sup>2</sup>.

人間は自分の利害得失を尺度として自然現象を都合よく判断しがちです。しかし屋根に被害をもたらす風や雨も森を育むように、私たちの計算を超えた働きをしているのだから、私たちは自らを「自然の中心であり、世界の目的でありその最高の根拠」だと思い込むべきではない。フローベールはこのような趣旨のことを述べて、人間の「傲慢」を戒めています。また1853年の7月にルーアンとその近郊に季節外れの雹が降った際にも同様の趣旨のことを述べています。

En contemplant tous ces petits arrangements factices de l'homme que cinq minutes de la nature ont suffi pour bousculer, j'admira le vrai ordre se rétablissant dans le faux ordre. (...) Cela est bon. On croit un peu trop généralement que le soleil n'a d'autre but ici-bas que de faire pousser les choux. Il faut replacer de temps à autre le bon Dieu sur son piédestal. Aussi se charge-t-il de nous le rappeler en nous envoyant par-ci par-là quelque peste, choléra, bouleversement inattendu et autres manifestations de la Règle, à savoir le Mal- contingent qui n'est peut-être pas le Bien- nécessaire, mais qui est l'Être

enfin : chose que les hommes voués au néant comprennent peu<sup>3</sup>.

「太陽はキャベツを栽培するためにある」と思い込んでいる人間にとっては、自然の災禍は紛れもなく「悪」ですが、それは神の人間に対する一種の警鐘であるとフローベールは考えています。こうした「悪」は人間にはほとんど理解の叶わぬものですが、それこそは「存在」l'Êtreというものなのだ、とフローベールは述べています。大文字で「存在」と書き記していることから、フローベールの発想は存在論的であり、広義のメタフィジックに関わっているとだけここでは指摘しておくに止めます。

ここで思い起こされるのは、1755年11月1日にリスボンを襲った大地震です。建物の倒壊、火災、津波によって数万人の生命を奪ったこの災厄は、思想上の問題としても文人たちに深甚な影響を及ぼしました<sup>4</sup>。ここではさしあたり三つの立場を指摘するに止めておきます。第一の立場は、ライプニッツの神義論を通俗化した最善説、すなわち神が創造したこの世界は悪を含んでいて完璧ではないが、最善の世界である（「すべてよし」とするオプティミズムです。第二は、この通俗化された最善説を痛烈に批判して、闇夜のなかで光を探しながら災禍の不条理を耐え忍ぶしかないとするヴォルテールの立場です。第三は、災禍を招いたのは、人間が都市に密集して居住していたためであり、神から与えられた自由意志を濫用している人間の責任をこそ問題にすべきだとするルソーの立場です。フローベールの見解は、ルソーとはむしろ対蹠的ですが、ヴォルテールとも微妙にニュアンスが異なっています。またキリスト教的観念に対しては、フローベールは不可知論の立場から慎重な距離を置いていますので<sup>5</sup>、いわゆるオプティミズムの立場と同一視するわけにはいかないでしょう。

いずれにしても、フローベールの災禍論は、人間の傲慢に対する批判という点で自ずと道徳性を色濃く帯びていると同時に、通常の世俗的モラルとは明らかに異質なものです。ここでいう世俗的モラルとは、〈苦勞や美德は報われるし、また報われるべきである〉という、古今東西の人間社会の秩序の基礎になっている因果応報的なモラルのことです。このような世俗的モラルからすれば、フローベールの批判は、美德や苦勞の報いを不当に無視しているように見えることでしょう。

ところでフローベールは文学とモラルを切り離れたなどとはしばしば言われますが、フローベールがモラルそのものを頭から否定しようなどとは考えてはいなかったことは、書簡のなかで、次のように語っていることから明らかです。

Si le lecteur ne tire pas d'un livre la moralité qui doit s'y trouver, c'est que le lecteur est un imbécile ou que le livre est faux au point de vue de l'exactitude. Car, du moment qu'une chose est vraie, elle est bonne<sup>6</sup>.

読者は作品から「そこにある筈の教訓を引きださないとすれば、それは読者が愚かであるか、あるいはその書物が正確さという点で偽物であるから」であり、「あることが真であるなら、それは善きものであるからなのです」と語っています。では、自然を見下す人間中心主義に対するフローベールの批判は、人間世界における悪とモラルに関しては、どのような姿をとって現れてくるのでしょうか。ここでは『ボヴァリー夫人』に即して考えたいと思います。

## 2. 農事共進会の場面における〈美徳の報い〉

この問題を考えていくうえで『ボヴァリー夫人』第二部7章の有名な農事共進会の場面が参考になります。農事共進会とは、農業振興を目的に1830年代に制定され、毎年各地で催されるようになったものですが、小説のなかでは、知事代行の参事官が農業関係者を野蛮な自然を文明化する事業の先頭に立つ開拓者であると称え、「進歩と有徳の人士」« vous, hommes de progrès et de moralité ! »と呼んで賞賛します。ここで注目すべき点は産業の進歩と道徳が結びつけられていることです。ついで参事官は、地方農村の「愛国心」、「有益なる目的の追求」につとめ、各人の幸福、国家社会に貢献する英知を高く評価し、「これまでいかなる政府も諸君の辛勞をかえりみてこなかった。黙々たる美徳の報いをお受け下さい。国家は今後皆さんの上に目を注ぎ、皆さんを激励し、保護し、皆さんの正当なる要求に耳を傾け、皆さんの痛苦なる犠牲の重荷を軽減すべく最善を尽くすことを信じていただきたい」と約束します。参事官の演説は、美徳の報いという世俗的モラルに巧みに訴えながら、農業振興という国家的利益を追求する功利主義に貫かれているわけです。ここでは功利主義という用語を、利益や快樂の獲得を第一義的な価値と見なす考え方というほどの意味で使うことにします。参事官のこの約束を裏付けるように、農事共進会は耕作成績優秀者の表彰式に移ります。優秀者の一人の名前「カトリーヌ・ニケーズ・エリザベート・ルルーさん」が呼ばれ、みすばらしい身なりの老婆が、なぜ自分の名前が呼ばれるのか理解できないまま壇上に進み出てくると、参事官は「温情あふれる」« paterne »態度を示します。そして老農婦の「同一農場に54年勤続に対して25フラン相当の銀メダル」が授与されます。老農婦の54年にわたる「黙々たる美徳」と25フラン相当の銀メダルという報酬との間の埋めがたい落差は、報いを期待する世俗的なモラルと実際の社会の現実との隔たりを示しており、農民を鼓舞する農事共進会が功利主義に貫かれたセレモニーであることを暗に暴露しているわけです。

しかしながらフローベールの観点からすると、問題は半世紀余にわたる勤勞という美徳に対する報酬の多寡の問題にのみ還元することはできない点にあります。報酬が少なすぎるという世俗的モラルの側からのある意味でもっとも批判は、利害得失という功利的な枠組みのなかに依然として留まっているからです。フローベールの書簡の一節によれば<sup>7</sup>、政治的主張はすべて、畢竟自己中心的な損得という功利的枠組、すなわち「有用性」の限界内でしか展開され得

ない性質のもので、フローベールにとってはこの有用性、功利性という枠組み自体が本当は問題なのです。農民が聖なる犠牲者として描かれていないのも、この点と無関係ではありません。表彰式が終わると、農民が家畜を叩いて乱暴に扱っている場面が書き込まれています。

chacun reprenait son rang et tout rentrait dans la coutume : les maîtres rudoyaient les domestiques, et ceux-ci frappaient les animaux, triomphateurs indolents qui s'en retournaient à l'étable, une couronne verte entre les cornes<sup>8</sup>.

家畜を手荒に扱う農民は家畜を道具化しているわけで、人間中心主義を背景とした功利主義が農村社会全体に及んでいる様子が描かれていると解釈できます。

### 3. オメにおける美德の報いの行方

この小説の中では、高利貸しのルルーと並んで功利主義を体現している際だった作中人物として、薬剤師オメがいます。店の奥で違法な診察をしてシャルルから患者を奪って金を儲けながら、名誉勲章の受勲という人知れぬ野心を抱いているオメは、コレラの流行した際に防疫に献身的に貢献し、公益に益する各種の著作を出版して、「あとはもう火事の時にでも目立った働きをして注目されれば、いただけるさ！」<sup>9</sup>と期待に胸を膨らませています。さらに政治的節操を欠いてまで県知事に接近したり、国王に「然るべき配慮」を乞う嘆願書を呈しています。彼にとって、名誉勲章という報いは結果ではなく、目的なのであり、すべてはそのための手段に過ぎません。

善行を積む者は、社会にとって有益な成員になり、報酬を得ることさえ期待できますが、報酬が自己目的化したり善行が他人に対して誇示されるようになるやいなや、或る決定的な変質が生じてしまいます。善行もまた優越感や虚栄心の所産でしかなくなってしまうと若きフローベールは友人に書簡のなかで説いています。ここでは17才のフローベールが、手紙の中で、友人に披瀝している省察の一節を引用しておくに止めておきます。

(...) je suis parvenu à avoir la ferme conviction que la vanité est la base de tout, et enfin que ce qu'on appelle conscience n'est que la vanité intérieure. Oui, quand tu fais l'aumône, il y a peut-être impulsion de sympathie, mouvement de pitié, horreur de la laideur et de la souffrance, égoïsme même ; mais, plus que tout cela, tu le fais pour pouvoir te dire : je fais du bien, il y en a peu comme moi. Je m'estime plus que les autres, pour pouvoir te regarder comme supérieur par le cœur, pour avoir enfin ta propre estime, celle que tu préfères à toutes les autres<sup>10</sup>.

「僕は、虚栄心こそがすべての基礎であり、良心と呼ばれているものは、隠された虚栄心にすぎないという揺るがぬ確信を抱くに至った」とあるように、人間の善行に潜んでいるものに冷徹な分析のメスを加えていくと、そこに立ち現れてくるのは、「自分は他の人よりも立派なのだ、自分は他人より優れた心情を持っているのだと思」わずにはいられない「虚栄心」の迷宮なのです。蜘蛛の巣のように張り巡らされたこの虚栄心は、或るときは伏流のように隠れながら、或るときは善行や名誉の意匠を纏って地表へ躍りでてきます。フローベールのこの書簡の一節は、「〈私〉とは憎むべきものである」<sup>11</sup>というパスカルの『パンセ』の有名な一文を思い起こさせずにはおきません。

さて、オメは毎朝新聞に叙勲の記載を紙面に探しますが、見当たりません。

Et chaque matin, l'apothicaire se précipitait sur le journal pour y découvrir sa nomination, elle ne venait pas. Enfin, n'y tenant plus, il fit dessiner dans son jardin un gazon figurant l'étoile de l'honneur, avec deux petits tordillons d'herbe qui partaient du sommet pour imiter le ruban. Il se promenait autour, les bras croisés, en méditant sur l'ineptie du gouvernement et l'ingratitude des hommes<sup>12</sup>.

そこで頭にきたオメは、名誉勲章の星形を象った芝生を庭に造らせ、そのてっぺんから繕り紐めいた短い草をはわせて勲章の綬のつもりにして、「政府の無能と人間の忘恩について思い巡ら」しながら、腕組みをしてそのまわりをぐるぐる歩き回った、とあります。庭はオメの欲望対象である名誉勲章を象っており、功利主義が自然を道具化している様子がここにもよく窺えます。また、オメが「美徳」の報酬を得られず、この世の不条理について思いを巡らす姿は、パロディーめいた趣きがあります。小説の末尾では、オメがついに名誉勲章を受勲したことが近接過去形で語られており、この野心的な薬剤師は物語世界における最終的な勝利者のような印象を読者に与えます。

Depuis la mort de Bovary, trois médecins se sont succédé à Yonville sans pouvoir y réussir, tant M. Homais les a tout de suite battus en brèche. Il fait une clientèle d'enfer ; l'autorité le ménage et l'opinion publique le protège.

Il vient de recevoir la croix d'honneur<sup>13</sup>.

小説の末尾の有名な一文「彼は最近名誉勲章をもらった」は近接過去形で書かれており、その直前の「当局は彼に手心を加え、世論は彼を擁護している」は現在形で書かれています。小説が閉じられた時、物語の結末はほぼ現在形で読者に差し出されているわけです。そのためにオメが物語社会の最終的な勝利者であると今日にいたるまで研究者の間で例外なく自明視され

てきたのです。しかし第二部冒頭で、語り手はボヴァリー夫妻の転居先のヨンヴィルがこれといった特色のない停滞しきった村であることを紹介しながら、次のように語っていました。

Depuis les événements que l'on va raconter, rien, en effet, n'a changé à Yonville. Le drapeau tricolore de fer-blanc tourne toujours au haut du clocher de l'église, la boutique du marchand de nouveautés agite encore au vent ses deux banderoles d'indienne, les fœtus du pharmacien, comme des paquets d'amadou blanc, se pourrissent de plus en plus dans leur alcool bourbeux, et, au-dessus de la grande porte de l'auberge, le vieux lion d'or, déteint par les pluies, montre toujours aux passants sa fissure de caniche<sup>14</sup>.

「これから物語ろうとする事件以来、事実ヨンヴィルではなに一つ変わっていない。(…) 薬剤師の店の胎児標本は、(…) だろだろに濁ったアルコールのなかで次第にひどく腐っていく」という一節が目を惹きます。「これから物語ろうとする事件」とは、第二部、第三部で語られる事件、とりわけエマの自殺、シャルルの死、そしてオメの名誉勲章受章を指すと考えて大過ないでしょう。現在オメの店に展示されているまさに「人間」を喚起する胎児標本が腐食していく描写が示しているように、ヨンヴィルの様子はオメの受章に沸く村とは思えないほど沈滞しきっています。片田舎の一薬剤師の勝利なるものが、何らの変化をももたらさない卑小で虚しい些事に過ぎないことが、物語世界を鳥瞰する語り手の超越的な観点から、あらかじめ読者に痛烈なイロニーを込めて告げられているのです。語り手がオメの最終的勝利にあらかじめ疑問符を発しているとするれば、この現在は小説末尾の「彼は最近名誉勲章をもらった」という近接過去形およびその直前の「当局は彼に手心を加え、世論が彼を擁護している」という現在形と矛盾していることとなります。確かにオメの「勝利」は動かしようのない虚構内事実です。しかし当局は「手心を加えている」のであり、彼を支えるのは「世論」のみです。考えてみれば、これは盤石とは言えない勝利であることは明らかです。もし当局が法律を厳格に適用して彼の違法行為を摘発すれば、名誉勲章の威光は一瞬にして地に墮ちてしまうからです。近代的な法治国家が整備されていく過程で、オメの「勝利」など砂丘の風紋に似た危うさを孕んでいるのです。語り手の超越的な観点は、そうした含意をも込めてオメの勝利を儂い虚栄として相対化していると解釈できます<sup>15</sup>。語りの現在は二重化されている、と言い換えることもできます。この二重性は、オメのかりそめの勝利という俗世の観点と俗世を超えた観点（第二部冒頭の語り手の観点）との二重性として捉え返すことができるでしょう。オメの勝利を語る物語世界に、もう一つの超越的な（時間ならざる）時間が影を落としているのではないのでしょうか。「全知の語り手」はいわゆる「バルザック的小説」なるものの残滓であるどころか、この小説全体にかかわる意味そのものを司っている存在であると言ってもおそらく過言ではないのです。

#### 4. 「神の不義」を呪うエマ

では、「退屈な田舎、愚鈍な町の間人、陳腐な暮らし」<sup>16</sup>に幻滅を覚えたヒロインのエマ・ボヴァリーは、功利主義を超えたのでしょうか。エマは、自分の思い描いていた結婚生活のイメージと現実との隔たりに失望して、幸福な女性への羨望を募らせます。

Est-ce que cette misère durerait toujours ? est-ce qu'elle n'en sortirait pas ? Elle valait bien cependant toutes celles qui vivaient heureuses ! Elle avait vu des duchesses à la Vaubyessard qui avaient la taille plus lourde et les façons plus communes, et elle exécrait l'injustice de Dieu<sup>17</sup>.

「この惨めさはいつまで続くのだろうか。(…)自分の値打ちは、しかしながら幸せに生きている女たちと比べても劣りはしないのだ！」というように、エマはヴォビエサールの館で出会った貴婦人たちに対する羨望を募らせていきます。行為に対応した結果がもたらされないとき、人は世俗的モラルの枠組みでは合理的に説明できない理不尽な現実と直面します。少なくともエマにとっては、トストでの暮らしは理不尽で、不当なものに映ったのです。そして一旦火のついた羨望は激しくなるばかりで、「そこで彼女は神の不義を憎んだ」というところまで行き着きます。エマは、旧約聖書で語られる不条理な苦難に遭う義人ヨブに自らを擬しているかのように、「神の不義」l'injustice de Dieuを憎むのです。小説の第二部にはいると、

Une femme qui s'était imposé de si grands sacrifices pouvait bien se passer des fantaisies. Elle s'acheta un prie-Dieu gothique, et elle dépensa en un mois pour quatorze francs de citrons à se nettoyer les ongles ; elle écrivit à Rouen, afin d'avoir une robe en cachemire bleu ; elle choisit chez Lheureux la plus belle de ses écharpes<sup>18</sup>.

「こうまで大きな犠牲を払って来た女性には、少々の気ままだは許されてもよいと思」い、高価な買い物を始めます。自分は犠牲を払ってきたのだから、その報酬を求めるのは当然だとする意識が、その後のロドルフやレオンとの恋愛へ彼女を促し駆り立てていきます。しかし語り手はエマのこうした気質について次のようないささか辛辣なコメントを残していました。

Il fallait qu'elle pût retirer des choses une sorte de profit personnel ; et elle rejetait comme inutile tout ce qui ne contribuait pas à la consommation immédiate de son cœur, — étant de tempérament plus sentimentale qu'artiste, cherchant des émotions et non des paysages<sup>19</sup>.

「彼女は物事から自分の利益となるものだけを引き出さなければ気が済まなかった。自分の心情がすぐに消費するのに寄与しないものはすべて無益なものとして捨て去った」と語り手はコメントしています。ボードレールが看取したように、作者により「男性的な血」を注入されたエマは、その希求の激しさゆえにブルジョワ道徳を脅かす存在であることは確かです。しかし反面、自らの「利益」や「報い」を直ちに獲得しようとして、他を顧みない点において、参事官やオメの功利主義に一脈相通ずるところがあります。すなわち、自己中心的な傲慢 « orgueil » がそこにやはり見て取れるのです。こうした傲慢は、フローベールが『ボヴァリー夫人』を執筆する前に書き上げた『聖アントワヌの誘惑』のなかで主人公を誘惑する七大罪の最初の大罪として、羨望 « envie » や色欲 « luxure » に先立って登場しています。両作品の関係について断絶を指摘することがフローベール研究の常套になっていますが、エマを襲う断末魔の苦しみを思い起こすならば、両作品には宗教的倫理的な主題が通底していることは明らかです。

## 5. シャルルの〈報われない美德〉

しかしながら、この小説には、美德の報いを求めずに、寡黙に生きている人物も描かれています。それはエマの死を真に悲しんでいる夫のシャルルです。エマの病状を気遣うシャルルは、医者から転地療法を勧められて、患者から信頼を得ていたトストから、オメが待ち構えているヨンヴィルに転地したのでした。妻の健康を気遣う彼の素朴な善意は、ロドルフに誘惑の絶好の機会を提供し、さらにエマのルーアンでのレオンとの逢い引きの機会と口実を与えてしまったのでした。エマの死後に発見した彼女の手紙を通してエマの不倫を知っても、シャルルは裏切られたとは思わず、娘を連れて日が暮れるまで彼女の墓参りを熱心に続けています。

Le soir, dans l'été, il prenait avec lui sa petite fille et la conduisait au cimetière. Ils s'en revenaient à la nuit close, quand il n'y avait plus d'éclairé sur la Place que la lucarne de Binet<sup>20</sup>.

およそ報酬というものを一切期待できない死者への愛は、『まごころ』の女中フェリシテが鸚鵡ルルーの剥製を死ぬまで愛し続けることを思い起こさせます<sup>21</sup>。シャルルのこうした行為は、オメが誇示する慈善活動なるものとまったく対照的です。善行を積む者は、社会にとって有益な成員になり、報酬を得ることも期待できますが、善行が他人に対して誇示されるやいなや、或る決定的な変質が生じてしまいます。善行もまた優越感や虚栄心を生む温床となってしまう怖れがあるからです。エマの死後にシャルルはエマのかつての愛人口ドルフと偶然再会します。草稿には、ロドルフの目には、シャルルの抱いている亡きエマへの愛は「誇りを欠いた

情熱」であり、「あまりにも広大で非人称」の域に達していて、到底理解の及ばないものに映ったということが書かれていました。

Car il [=Rodolphe] ne comprenait rien à cet amour vorace (...) à la passion vide d'orgueil (...) qui arrive presque aux proportions d'une idée pure, à force de largeur et d'impersonnalité<sup>22</sup>.

この一節は最終稿では削除されています。シャルルの愛の広大さや非人称性を認識することは、エゴイストのロドルフには似合わないとしてフローベールは判断したのでしょう。ここで「非人称性」という言葉が用いられていることは注目に値します。これはフローベールの美学の核心を示す言葉でもあるからで、モラルと美学の結びつきを解く鍵がここに秘匿されているように思われます。また小説の最終稿ではエマのかつての愛人であったこの男にシャルルは「私はあなたを恨んでいません」*« Je ne vous en veux pas »*という言葉をかけて「赦し」ます。ここでゆくりなく想起されるのは、バルザックの『現代史の裏面』の結末でラ・シャントリー夫人が娘をかつて死刑に処した男が赦しを必死に乞う姿を前にして「あなたを赦します」*« je vous pardonne »*<sup>23</sup>という言葉をかける感動的な場面です。但し二つの場面の間には大きな相違があります。ラ・シャントリー夫人の威厳を保った慈悲深い態度に男は深く感動するのに対して、ロドルフの方はシャルルの言動にお人好しでどこか滑稽なところがあると感じたままに再会の場面は終わってしまいます。ラ・シャントリー夫人の赦しを可能にしたキリスト教の枠組みがもはや当事者の間には存在していないのです。シャルルの赦しの言葉は、赦しを乞うてさえいないロドルフにとっては場違いでグロテスクな響きを帯びてしまいます。そもそも許しを乞うていない者を赦すということは、世俗的モラルの観点からすれば過剰なことです。しかしシャルルの赦しには、狭隘な世俗的モラルの限界を浮き彫りにするようななにか法外なものが秘められてはいないでしょうか。およそ報いを求めないモラルならざるモラルがそこに姿を顕しているのではないのでしょうか。

ロドルフと再会した「その翌日」にシャルルは、「青葉棚のベンチに行き腰を掛け」、愛する女性の「一房の長い黒髪を両手に持ったまま」、燦然たる陽光の降り注ぐ自然の中に融け込み拡散するかのように死んでいきます。

Le lendemain, Charles alla s'asseoir sur le banc, dans la tonnelle. Des jours passaient par le treillis ; les feuilles de vigne dessinaient leurs ombres sur le sable, le jasmin embaumait, le ciel était bleu, des cantharides bourdonnaient autour des lis en fleur, et Charles suffoquait comme un adolescent sous les vagues effluves amoureuses qui gonflaient son cœur chagrin.

À sept heures, la petite Berthe, qui ne l'avait pas vu de tout l'après-midi, vint le chercher pour dîner. Il avait la tête renversée contre le mur, les yeux clos, la bouche ouverte, et tenait dans ses mains une longue mèche de cheveux noirs<sup>24</sup>.

「日の光が格子の間からこぼれていた。葡萄の葉が砂上に影をつけていた。ジャスミンの花が匂っていた。空は藍色だった。(…) シャルルは切ない心を満たすほどぼろの愛情に少年のように胸を詰まらせた」。確かに「青葉棚のベンチ」は、エマとロドルフが逢引を重ねた場所でしたので、そのことを知らないシャルルが最後にそこでひっそりと死んでいくという設定にイロニーが働いていることは明らかです。しかしそのことによって、自然の中への汎神論的とも形容しうる拡散の印象が弱められることはありません。フローベール自身も、この小説の執筆中に「イロニーによって悲壮なものが損なわれることはない」<sup>25</sup>と述べています。ここでは美德の報いを求める世俗的モラルや功利主義は跡形もなく姿を消しており、人間世界を凌駕する自然の顕現を垣間見ることができます。優れた医者でも聖人でもないシャルルが、世俗的モラルの彼岸とでもいうべき世界に繋がる存在となりえているとすれば、それは彼がエマに対する愛情を愚直に、彼なりに精一杯生きたからでしょう。傲慢さを欠いた「まごころ」un cœur simple の持ち主として、シャルルはエゴを脱した非人称＝没個性の領域に接近し得た稀有な存在と言えます。と同時にブルジョワ社会の異邦人と化したシャルルが周囲から愚弄され、グロテスクな相を帯びて描かれている理由もそこにあります。

## 6. 美学とメタフィジックとモラル

フローベールが、作者が神のように作品の「いたるところに存在しながらどこにも姿を見せない」没個性の美学のもとに『ボヴァリー夫人』を執筆したことはよく知られています。

L'auteur, dans son œuvre, doit être comme Dieu dans l'univers, présent partout, et visible nulle part. L'Art étant une seconde nature, le créateur de cette nature-là doit agir par des procédés analogues<sup>26</sup>.

フローベールが汎神論を説いたスピノザに終生敬意を払っていたことを思い合わせれば、「いたるところに存在」する「神」は自然と深く重なり合い、また「どこにも姿を現さない」という点で非人格的な impersonnel な側面をもつと考えられるでしょう。「没個性」の美学は、こうした「神」の捉え方と照応しています。芸術は「第二の自然」、自然の類同代理物 analogon として、作者と読者の間に位置を占めることになります。別の書簡では、芸術においてもっとも高度なことは、「笑わせることでも涙を流させることでもなく、自然のように物

思いにふけさせることだ」と述べ、優れた作品は、自然のように「外観は穏やかで、理解し難い」ものであると書き添えています。

Ce qui me semble, à moi, le plus haut dans l'Art (et le plus difficile), ce n'est ni de faire rire, ni de faire pleurer, ni de vous mettre en rut ou en fureur, mais d'agir à la façon de la nature, c'est-à-dire de faire rêver. Aussi les très belles œuvres ont ce caractère. Elles sont sereines d'aspect et incompréhensibles<sup>27</sup>.

自然が「理解し難い」ものであるのは、意味を与えようとする「人類の最も不吉で最も不毛な執念」<sup>28</sup>に由来する様々な「結論」を鏡のように弾き返し拒み続けるからです。その意味で自然は善悪の彼岸にあると言ってもおそらく大過ないでしょう。そして文学作品の創造という人間の営みが、人間中心主義的傲慢や個人的な虚栄心をかろうじて免れるためには、作者は神のような位置を占めるとしても、個性を誇示する表現主体であってはならないのです。作者は、「第二の自然」と化して「存在」l'Êtreを伝える作品のなかに偏在しつつ姿を可能な限り消さなければならないのです。そのためにこそ、没個性＝非人称的な美学が要請されたのです。フローベールが、〈作者—作品—読者〉の関係を〈神—自然—人間〉の関係とのアナロジーで考えていたことの意味がこうして明らかになります。そこに美学とメタフィジックとモラルとの緊密な結びつきが認められます。フローベールは『ボヴァリー夫人』において、「地方風俗」を通して世俗的モラルや功利主義に潜む傲慢さをあたかも神のような観点からイロニーやグロテスクを交えて描くことによって、人間中心主義を超えた廣大深遠な世界の存在を示唆しようとしたと言えるでしょう。その点にこそ作家フローベールにとっての真と美、そしてモラルならざるモラルが賭けられていたのではないのでしょうか。

## 註

1. 本稿は、日本フランス語フランス文学会秋季大会（2015年11月1日、於京都大学）で催されたワークショップ「文学と悪とモラル」での発表原稿に若干の加筆を施したものである。但し論旨に関わる変更はない。以下の拙論と内容上重なる点が少なくないことをお断りしておきたい。  
松澤和宏『「ボヴァリー夫人」を読む——恋愛・金銭・デモクラシー』、岩波書店、2004年。  
Kazuhiro Matsuzawa, « Une lecture pohtique de *Madame Bovary* : le bovarysme et l' envie démocratique postromantique » in *Revue Flaubert* n°5, 2005, [http://flaubert.univ-rouen.fr/revue/revue5/matsuzawa.php].  
Kazuhiro Matsuzawa, « Une lecture philosophique et ethique de *Madame Bovary*. Bonheur, envie, amour » in *Gustave Flaubert* 6, Lettres Modernes Minard, 2008, op. 13-26.
2. Lettre à Louise Colet, 26 août 1846. 書簡の引用は、以下の校訂版に拠る。Gustave Flaubert, *Correspondance*, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1973-2007, 5 volumes. 引用に際しては宛名と

日付を記した。

3. Lettre à Louise Colet, 12 juillet 1853.
4. 越森彦「リスボン大震災後のヴォルテールとルソー——神がいるなら、この世になぜ悪があるのか」、『アウリオン叢書15、文学と悪』白百合女子大学言語・文学研究センター編、弘学社、2015年6月、21-34頁を参照。
5. フローベールは、悪を原罪によって説明することは、理解し得ないものに原因を勝手に想定して説明してしまうことであるとして、敢えて不可知論に止まろうとする。「Pourquoi expliquer des choses incompréhensibles ? Expliquer le mal par le péché originel, c'est ne rien expliquer du tout. La recherche de la cause est antiphilosophique, antiscientifique, et les religions en cela me déplaisent encore plus que les philosophies, puisqu'elles affirment la connaître. (Lettre à Madame Roger des Genettes, [été, 1864])」。但し、この一節に続いて、宗教は、「心情の欲求」としては尊重されるべきだと付け加えていて、宗教を否定する立場には決して立たない。
6. Lettre à George Sand, 6 février 1876.
7. Lettre à Mlle Leroyer de Chantepie, 30 mars 1857.
8. II, 8, p. 283. Cf. Didier Philippot, *Vérité des choses, mensonge de l'homme dans Madame Bovary de Flaubert*, Honoré Champion, 1997, p. 244. 『ボヴァリー夫人』からの引用は以下の校訂版に拠る。Flaubert *Œuvres complètes* III 1851-1862, Paris, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 2013. 引用に際しては、部、章、頁を記した。なお訳文中の傍点は引用者によるものである。
9. « — Enfin, s'écriait-il, en faisant une pirouette, quand ce ne serait que de me signaler aux incendies ! » (III, 11, p. 455).
10. Lettre à Ernest Chevalier, 26 décembre 1838.
11. パスカル『パンセ (中)』、塩川徹也訳、岩波書店、2015年、327頁。
12. III, 2, p. 456.
13. III, 11, p. 458.
14. II, 1, p. 213.
15. この重要な点については、前掲の拙著『「ボヴァリー夫人」を読む——恋愛・金銭・デモクラシー』第5章「オメとは何者か」、特に205頁以下、および拙論 Kazuhiro Matsuzawa, « Une lecture politique de *Madame Bovary* : le bovarysme et l'envie démocratique postromantique » (in *Revue Flaubert* n°5, 2005) で論じているので、参照していただきたい。
16. I, 9, p. 201.
17. I, 9, p. 208.
18. II, 7, p. 259.
19. I, 6, p. 181.
20. III, 11, p. 456.
21. シャルルの愛については、前掲の拙論 « Une lecture philosophique et éthique de *Madame Bovary*. Bonheur, envie, amour » を参照していただければありがたい。
22. Ms. g. 223-6, f 334 r°.
23. Balzac, *La Comédie humaine*, tome VIII, Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, 1977, p. 412.
24. III, 11, p. 457.
25. Lettre à Louise Colet, 9 octobre 1852.
26. Lettre à Louise Colet, 9 décembre 1852.
27. Lettre à Louise Colet, 26 août 1853.
28. Lettre à Mlle Leroyer de Chantepie, 23 octobre 1863.

キーワード：フローベール『ボヴァリー夫人』、美德、報い、傲慢、人間中心主義、没個性

**Abstract**La vertu mal récompensée dans *Madame Bovary* de Flaubert

Kazuhiro MATSUZAWA

Dans sa *Correspondance* Flaubert ne cesse de répéter que la nature n'est pas faite pour l'homme, comme en témoignent les tremblements de terre ou la grêle qui mettent à mal un anthropocentrisme portant l'homme à se considérer comme le centre de la nature. Cette condamnation de l'orgueil est certes en partie morale, mais elle est aussi « amoral » dans la mesure où la nature dépasse l'ordre humain du bien et du mal. Une telle critique s'inscrit profondément dans l'univers diégétique de *Madame Bovary*. L'orgueil revêt souvent la forme de l'utilitarisme qui se manifeste, lors des comices agricoles, dans le discours du conseil Lieuvain qui prône les « vertus silencieux » des paysans que l'on exploite. Le triomphe du pharmacien Homais, apparemment récompensé par la croix d'honneur, est en fait rendu dérisoire par le narrateur qui annonçait préalablement au début de la deuxième partie que « depuis l'événement que l'on va raconter, rien, en effet, n'a changé à Yonville ». Quant à Emma Bovary, bien que l'excès du désir qui la conduit à exéquer « l'injustice de Dieu » menace l'ordre utilitaire du bourgeois, elle se soumet à l'égoïsme orgueilleux en cherchant la récompense immédiate de ses « sacrifices » : elle ne s'intéresse qu'à ce qui contribue « à la consommation immédiate de son cœur ». Au contraire, l'amour gratuit de Charles pour sa femme le distingue des autres et l'ouvre, lors de sa mort, à la nature d'une façon extatique et impersonnelle. Ainsi se profile l'esthétique de l'impersonnalité qui fera de l'œuvre « une seconde nature » pour le lecteur en mettant au jour la dimension éthique de la critique de l'orgueil anthropocentrique.

Keywords: Flaubert, *Madame Bovary*, virtue, reward, pride, anthropocentrism, impersonality